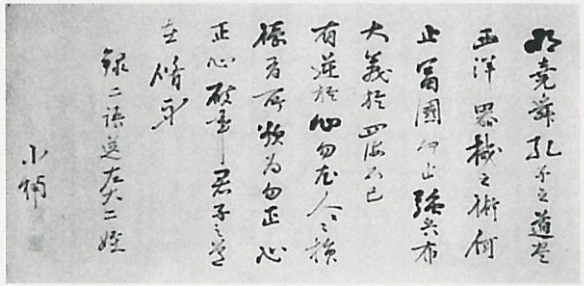
横井実学党の系譜

- 横井小楠
  - 徳富　一敬
  - 矢島　直方
  - 竹崎律次郎 (日新堂)
    - 不破唯次郎
    - 金森　通倫
    - 石光　真澄
    - 下村孝太郎
  - 安場　保和
  - 山田　武甫
  - 嘉悦　氏房 (広取学校)
    - 内田　康哉
    - 林田亀太郎
    - 紫藤　章
    - 遠山　参良
    - 高木第四郎
  - 大田黒惟信
  - 野々口為志 (熊本洋学校)
    - 横井　時雄
    - 横井　時敬
    - 徳富猪一郎・不破唯次郎
    - 蔵原　惟郭・金森　通倫
    - 海老名弾正・下村孝太郎
    - 石光　真澄
  - 内藤　泰吉 (古城医学校)
    - 北里柴三郎
    - 浜田　玄達
    - 緒方　正規



二甥（横井左平太・大平）への「送別の語」

堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を盡くす。何ぞ富國に止まらん、何ぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ。

心に逆うこと有るも人を尤むること勿れ、人を尤むれば徳を損ず。為さんと欲する所有るも心に正にする勿れ、心に正にすれば事を破る。君子の道は身を脩むるに在り。

参　観　案　内

開館時間　午前９時30分～午後４時30分
休 館 日　月曜日（祝日の場合は翌日）
　　12／29 ～ 1／3
入 館 料　高校生以上200円・小中学生100円
　　（熊本市内の小中学生・65歳以上等は無料）
所 在 地　〒861-2102 熊本市東区沼山津１－25－91
　　TEL（096）368－6158
所　　管　〒860-8601 熊本市中央区手取本町１－１
　　熊本市文化財課
　　TEL096-328-2740

平成25年10月

横井小楠記念館

市指定有形文化財　四時軒
市指定史跡　四時軒跡

熊本市文化財課

横井小楠

――その業績と生涯――

1. 視野は世界に

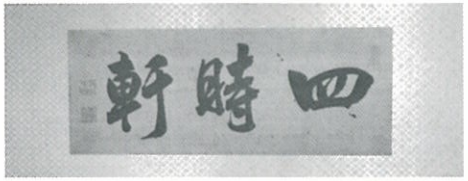
日本がかつてない大飛躍をなそうとするその前夜、将来の日本の歩むべき正しい道を示そうと努力した１人の人物がいました。文化６年(1809)熊本城下の内坪井に生まれたこの人物の名は、横井小楠です。横井小楠は、「国家は富むだけではいけない、また軍備を増強するだけでもいけない。地球上で一番大切なのは、お互いにその立場を認め合い、お互いがお互いをゆるす寛容の心がなければならない」と説いたのでした。

当時の四時軒

現在の四時軒

2. 現実に根ざした学問

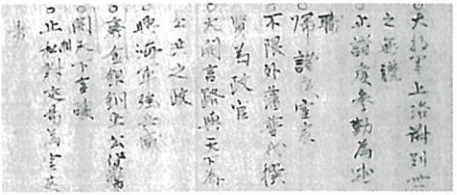
肥後藩には時習館という藩の学校があって、そこで小楠は抜群の成績で、天保８年(1837)には居寮長（塾長）に抜擢されました。そして２年後には江戸遊学を命ぜられ、水戸藩士藤田東湖などとも意見をたたかわせていたのですが、酒の上での失敗のため呼び戻されました。熊本に帰った小楠は、長岡監物、下津休也、荻昌国、元田永孚らと研究会を始め、文章や字句の解釈だけに力を注いでいたその頃の肥後の儒学に対し、現実に根ざした学問のあり方を示しました。これが実学党と呼ばれるものの起りです。やがて小楠は塾を開きます。そこに一番に入門したのが徳富一敬（蘇峰・蘆花の父）でした。竹崎茶堂（律次郎）、矢島直方（竹崎順子、徳富久子、横井つせ子、矢島楫子の兄）が続いて入門しました。嘉永２年(1849)越前藩の三寺三作という武士が諸国遊歴の途中、小楠を訪問し、その説に大変感激して帰りました。越前藩は小楠に学校についての教えを乞いました。嘉永５年(1852)の「学校問答書」という建白書が書かれました。この教育論には吉田松陰も大変感心し、長州藩にも推せんしようとしました。



四時軒の額　松平春嶽筆

3. 吉田松陰、坂本龍馬も訪れる

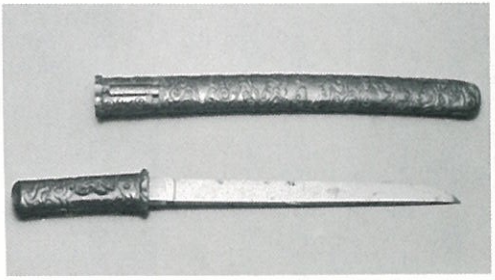
吉田松陰は、ペリーが浦賀に来た嘉永６年(1853)の10月、小楠を訪ねて来て、終日話し合っています。安政２年(1855)沼山津に転居した小楠は、この住まいを四時軒と称して、また塾を開きました。主張するところは攘夷論から開国論へ移っていきます。越前藩主松平春嶽からの招きで、安政５年(1858)から福井に行くことになります。やがて松平春嶽が幕府の政事総裁になったので、小楠も江戸に出て春嶽の大事な相談役をつとめ「国是七条」も建言しました。ところが、江戸詰めの肥後藩士と酒宴中に暗殺団に襲われ、同僚を見捨てて逃げたというので肥後藩から罰され、沼山津に一平民として暮らさねばならなくなったのです。下関砲撃事件や薩英戦争など、時代はめまぐるしく変転していた文久３年(1863)のことです。しかし日本は、その小楠を捨ててはおかなかったのです。勝海舟の使いで坂本龍馬が訪ねて来ました。慶応２年(1866)には勝海舟のはからいで、２人の甥横井左平太、大平をアメリカに留学させています。



国是七条

4. 明治新政府の要職に

維新になると新政府は、横井小楠を参与という位で京都に呼び出したのです。岩倉具視は、木戸、大久保らの参与の中でも、とくに小楠を頼りにしていて、夜を日についで相談したものです。小楠は、まさに新日本の政治家として重要な地位にあったのです。しかし、翌明治２年(1869)正月５日、太政官に出仕して退朝する途中、暗殺者たちに襲われ、短刀を抜いで防ぎましたが、病体でもありついに力尽きて倒れました。時に小楠61歳でした。墓は京都南禅寺の天授庵にあり、遺髪は熊本に持ち帰られ小楠公園に葬られています。



小楠遭難時の短刀